女子第33回全国高校駅伝競走大会

陸上部監督　永田　克久

雪が舞う西京極陸上競技場、一瞬の静けさの後スタートのピストルの音が響いた。色とりどりのユニフォームに身を包んだランナーたちが一斉に走り出す。1区の尾崎は、2週間ほど前のスピード練習で、足を痛めていた。トップを、争える実力を持ちながらも集団の中で、じっと我慢するレースを強いられた。20人ほどの第一集団から一人また一人こぼれ落ちていく。

痛みに耐えながら今の100％の走りを見せる。あと1km切った。高校生活最後の高校駅伝、前のランナーを必死に追い上げる「速い、誰よりも速い。」最後の上り坂で、どのランナーもあえいでいる。一気に追い上げた。あまりに急に順位を上げるほどのラストスパートだったので、2区白木を呼ぶアナウンスが間に合わなかった。

中継地点のラインの真中へ突っ込んでいった。「次の走者が、見つけれんかったら、かまんき真中へ突っ込め！」私の指示だった。39（高知のゼッケン番号）のアナウンスは、なかったが白木は、尾崎の上位での力走を信じ中継地点に飛び出した。11位で襷がわたり白木が走りだした後「39・39」とアナウンスがあった。

金閣寺までの約1ｋｍの上りを流れに乗って走ることが、この区間のポイントになるが、この位置では、オーバーペースも仕方ない。全国の強豪と渡り合い8位を争う集団でレースを進めた。紫明通りに入り疲労で動かなくなった足を懸命に動かす、最後のカーブを右に切って襷を外しラストスパート、順位を一つ上げ10位で3区、田所に襷を渡した。

全国ベスト16突破のカギは、3区・4区にかかっていた。どれだけこの2区間が、しのいでくれるか？祈るような気持ち速報の携帯画面を見た。「苦戦は承知　がんばれ纏、頑張ってくれ。」

山田高校陸上部歴代2位の泣き虫だった。大切に育てられたのだろう。入寮して両親が帰った後、泣いて泣いてほとほと困り果てた。2年生の時は、故障でメンバーから外れた。
しかし、たくさんの経験が、彼女を育てた。目標の16位以内14位で、1年生石本に繋いだ。

頭の中で、ザっと順位をくってみる。1年生石本、20位から25位、20位なら何とか、吉松でベスト16に届く。練習での勢いを買って最終エントリーで石本の名前の横に4区と書き入れた。「怖いもの知らずでカッ跳んでこい。」競技場の大型モニターを、そう願いながら見つめた。

16位　ヨタヨタしながらラストスパート　ラスト、カッ跳んではなかったが自身初の3ｋｍ9分台　区間15位の力走だった。

アンカーの吉松に襷が渡った。16位　目の前に、旭川竜谷・日体大柏・宇都宮文星女・青森山田・順天　届くか！　16位を守れるか？不安が胸を貫いた。

彼女は、入学後すぐ長い区間への対応が求められ中学校から上がったばかりの選手としては無理をさせた。「人より一汗。」5 時 30 分からの朝練習、チームメイトよりも早く起きて取り組んだ。三日坊主という言葉があるが、三日続けば上等である。簡単なことではない。だが、この子は、かならず、誰よりも早く起き、誰よりも距離を踏んできた。

駅伝の神様がいるのなら背中を押してあげてくれ。そう願う。ゲートから、仙台育英がトップで入ってきた。2 位　3 位と入ってくる。思わず指を折り、子供のように数を数える。8、9、10、11　来た！来た！来た！12 番目でゲートをくぐった。後ろから旭川竜谷　吉松も必死で逃げるが相手もあきらめない。「早く、速く。」心の中でそう叫びながら拳を握る。「ゴールや！」吉松も嬉しそうに両手を上げてゴール。思わず天を仰ぎ深く息を吸い、フーとはいた。

選手たちが、それぞれ区間からバスで帰ってきた。ハイテンションで帰ってくるかと思ったら全員、ホワホワといった感じで帰ってきた。疲れたのであろう。もっと喜んでもいいのにとこちらが、そう思うくらい控えめな選手たちだった。ケガをしていた尾崎は、もうまともに歩けなかった。彼女の足首をさすりながら、ガラにもなく涙を流してしまった。

宿舎に帰り、スタッフ、マネージャー、部員全員と顔を合わした。口にする言葉は、「よかった、よかった。」ただ、それだけだった。

全国の強豪チームを相手に、自分たちの願う成果を上げることは、非常に難しい。
それでも、高知県代表チームとして立ち向かい、チャレンジする子供たちにエール送る。

最後になるが、コロナ禍においても子供たちを、変わらず見守り応援していただいた学校関係の皆様をはじめ地域の方々、浜田先生、中西さん、大塚さん、山田高校女子陸上部 OB、OG、保護者の皆様に厚く感謝したい。